

教員養成における病弱児教育の授業内容の改善
－ 病気の子どもの多様な教育的ニーズに着目して－

堺 るり子*

Improvement of lesson content for education of children with illnesses in teacher training : Focusing on the diverse educational needs of children with illnesses

Ruriko SAKAI

要約

病弱児教育は、病弱特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級、小・中学校の通常学級を含む多様な学びの場で行われている。現在、病弱児教育においては、病弱特別支援学校の単独校の減少や併置校の増加、入院期間の短期化・頻回化、疾病や障害の多様化、心身症・精神疾患等の増加、不登校への対応、復学支援等、多くの課題がある。本稿では、病弱児教育の今日的課題を踏まえ、病気の子どもの多様な教育的ニーズに着目して、病弱児教育の授業内容を考察した。

キーワード：病弱児教育、心身症・精神疾患等、自立活動、多様な教育的ニーズ

Abstract

Education for children with illnesses is conducted in various learning places, including special support schools for children with illnesses , special support classes for children with illnesses and physical weakness, and regular classes for elementary and junior high schools. Currently, in the education of children with illnesses , the number of independent special support schools for children with illnesses is decreasing and the number of schools in parallel is increasing, the length of hospital stays are shortening and becoming infrequent, illnesses and disabilities are diversified, and psychosomatic disorders and mental illnesses are increasing. There are many issues such as responding to school attendance and support for children returning to school. In this article, based on the current issues of education for children with illnesses , we focused on the diverse educational needs of children with illnesses and considered the content of the education for such children.

Keywords: education for children with illnesses, psychosomatic and mental illness, independence activities, diverse educational needs

受理年月日：2020年11月30日 *高松大学発達科学部講師

1. はじめに

病弱児教育とは、病気のため、あるいは病気にかかりやすいため、継続して医療や生活規制が必要な子どもへの教育である(独立行政法人国立特別支援教育総合研究所、2017)。教育の場としては、病弱特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級、病院内に設置された院内学級、通常学級がある。また、病状や障害の程度が重く、通学が困難な児童生徒に対して、訪問教育を行っている。近年、病弱特別支援学校では、病弱単独校の減少や併置校の増加、入院期間の短期化・頻回化、疾病や障害の多様化、心身症・精神疾患等の増加、不登校への対応、復学支援等、多くの課題に直面している。日下(2015)は、「病弱教育の今日的課題を明らかにするために、病弱特別支援学校にある病弱教育におけるノウハウを集約し、質的分析のもと病弱教育のニーズを整理し直すことが必要である。」[1]としている。柴垣(2020)は、「病弱特別支援学校自身が自校の教育課題をどのように認識し、どのように対応しようとしているかを明らかにすることは、日下のいう病弱教育の今日的課題を明らかにするためにも必要であるといえる。」[2]と述べ、病弱特別支援学校単独校の課題を病弱特別支援学校固有の課題として分析し、課題間の相互関係について考察した。病弱特別支援学校からあげられた課題は、「授業づくり・指導・教育課程」、「学校組織体制・学校運営」、「病院・保護者等との連携」、「教職員の専門性向上」、「ICT活用」、「進路指導・キャリア教育」、「センター的機能」である。柴垣(2020)は、課題として最も多かった「授業づくり・指導・教育課程」や次に多かった「学校組織体制・学校運営」の関係を中心に、他の課題がどのように関係しているかを分析している。分析の結果からは、「病弱特別支援学校が様々な課題に直面していること、それらの課題が相互に関連しあっており、課題の解決に当たっては教職員の専門性向上を中心に、様々な課題を相互に関連付けた具体的な対応が必要であること」[3]を明らかにした。上記の病弱児教育における今日的課題は、全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会において、2016年度の第57大会以降分科会のテーマとして設定され、各テーマに基づき実践が報告されている。この研究協議会は、「病弱虚弱教育関係者をはじめ、学校教育に携わる者が、日頃の教育実践やその中で抱えている様々な課題について研究発表・討議し、病弱虚弱教育の深化と充実を図り、加えて今後の特別支援教育における病弱虚弱の子どもたちの教育のあり方を探る」[4]ことを、目的としている。病弱児教育に携わる教員、医療関係者、行政関係者、保護者等が参加し、病弱児教育に関する研究調査や研究協議会等、病弱児教育の推進に資する活動を行い、研究協議会としては最も歴史がある。ここ最近、本研究協議会の主題は、「児童生徒個々のニーズに応じた、生きる力を育む病弱虚弱教育のあり方」と設定されている。副題のキーワードは、「多様な子どもたち」、「多様化する病弱虚弱教育」である。

本稿の目的は、病弱児教育の今日的課題を踏まえ、筆者が担当する病弱児教育で扱うべき内容について検討することである。筆者が作成した本学の病弱児教育のシラバス(2020年度)及び授業の内容等を振り返り、将来、保育士や幼稚園・小学校教諭、特別支援学校教諭として病弱児の保育・教育に携わる学生が、実践的な知識と技能を身に付けることができるように、授業の目標・内容を考察する。

2. 本学における教員養成

2. 1 教員養成の目標及び当該目標を達成するための計画

本学の発達科学部は、乳幼児期から学童期における子どもの成長・発達を究明し、個々の子どもに応じた支援をするために、教育・保育の場における、専門的知識と技能に裏付けられた実践的能力を有する人材を育成することを教育研究上の目的としている。このため、教育・保育に携わる者に求められる高い使命感・倫理観や豊かな心を持ち、教育・保育に関する知識体系と実践力を兼ね備え、保護者や子育てに関わる様々な人々と協働して、教育・保育に関する諸問題を適切に解決することができ、資質向上のために継続して学ぶことを目標としている。

当該目標を達成するための計画として、カリキュラムは「子育て支援に関する基礎科目」、「子どもの育ちを支える科目」、「子どもの体の育ちを支える科目」、「子どもの知性の発達を促す科目」、「特別な支援を必要とする子育てを支えるための科目」、「子どもの音楽教育に関する科目」で構成している。また、幼児教育コース、児童教育コース、特別支援教育コースの三つのコースを設置し、それぞれのコースで幼稚園教諭と保育士、小学校教諭、特別支援学校教諭を養成すると共に、幼稚園教諭一種免許状、保育士資格、特別支援学校教諭一種免許状（知的障害者、肢体不自由者、病弱者）を取得できるようにカリキュラムを構成している。

2. 2 特別支援学校教諭一種免許状取得の科目と単位数

本学では、幼稚園教諭一種免許状、小学校教諭一種免許状を取得する学生を対象として、特別支援学校教諭一種免許状を取得することができる体制が整えられている。開設科目と単位数は表1のとおりである。

表1 特別支援学校教諭一種免許状 開設科目・単位数

本学開設科目	単位数		本学開設科目	単位数	
	必修	選択		必修	選択
特別支援教育総論	2		肢体不自由児教育	2	
特別支援教育演習		1	肢体不自由児教育演習		1
知的障害児の心理	2		視覚の発達と障害	2	
知的障害児の生理・病理	2		聴覚障害教育総論	1	
病弱児の心理・生理・病理	2		重複障害教育総論	1	
肢体不自由児の心理・生理・病理	2		LD等教育総論	2	
障害児の教育課程と指導法	2		特別支援教育実習(事前事後指導含む)	3	
特別支援教育指導法研究	1				
知的障害児教育	2				
知的障害児教育演習	1				
病弱児教育	2				
病弱児教育演習		1	合計	29	3

なお、先に述べた「特別な支援を必要とする子育てを支えるための科目」は、表1の開
設科目に「社会的養護Ⅰ・Ⅱ」、「障害児保育Ⅰ・Ⅱ」、「子育て支援」、「社会福祉」、「子
ども家庭福祉」、「特別支援教育」を加えている。

3. 病弱児教育の概要

3. 1 授業計画及び到達目標

本授業科目の配当年次は3年次で、2020度は23名の学生が前期に受講した。受講した
学生の半数が、2年次に病弱児の心理・生理・病理を履修している。筆者が担当した病弱
児教育の授業計画を表2で示す。

表2 高松大学発達科学部 病弱児教育授業計画

回	内容
第1回	病気の子どもを取り巻く現状
第2回	病弱児教育の定義と歴史
第3回	病気等の状態に応じた配慮事項① 白血病等悪性新生物
第4回	病気等の状態に応じた配慮事項② 筋ジストロフィー、神経系疾患
第5回	病気等の状態に応じた配慮事項③ 心臓病、糖尿病、腎疾患、アレルギー疾患
第6回	病気等の状態に応じた配慮事項④ うつ病等の気分障害、不登校、発達障害
第7回	学習指導要領を踏まえた指導
第8回	各教科の指導
第9回	自立活動の指導、ICT機器を活用した指導
第10回	心身症・精神疾患のある児童生徒の指導
第11回	ベッドサイド教育、病院との連携
第12回	進路指導、キャリア教育
第13回	高校生への支援及び学習指導
第14回	特別支援学校（病弱教育）のセンター的役割
第15回	医療及び福祉関係機関、家族との連携・協働

*定期試験実施

病弱児教育の到達目標は、以下の4点である。

1. 病弱児教育の対象となる疾患等について理解し、説明することができる。
2. 病弱児教育の意義と役割について理解することができる。
3. 一人一人に応じた適切な指導・支援について理解することができ、実践に必要な知識・
技能を身に付けることができる。
4. 医療及び福祉関係機関、家庭との連携・協働に関する課題について、意見を述べるこ
とができる。

授業は、学生が2年次に履修した病弱児の心理・生理・病理を基盤として進めることを、
授業の紹介文に明記した。到達目標の1、2、4は病弱児の心理・生理・病理と同様の内

容を含み、第2回から第6回の授業内容も重なっている。

本学で病弱児の心理・生理・病理を担当する磯部は、「病弱児に対しては、医療的な対応が必要とされるので、多様な専門性を持つ人材とコミュニケーションが十分にでき、協力・協働できること」[5]を重視している。筆者も同じ見解で、到達目標4については具体的な実践をできるだけ多く紹介するように努めた。

3. 2 受講した学生の実態と受講理由

学生23名の内、4年生が1名、3年生が22名である。11名が小学校教諭又は特別支援学校教諭、2名が保育士又は幼稚園教諭、10名は福祉施設職員、企業等、他の職種を志望している。

学生が病弱児教育を受講した理由は、以下のように様々である。

- ・特別支援学校教諭免許状を取得するために必要であるから。
- ・学校支援ボランティアで特別支援学級に配属され、障害のある児童との関わり方などを知りたいと思った。
- ・病弱児が学校生活や日常生活を送る上で、どのような事に苦痛を感じているのか、どのようにその苦痛を乗り越えているのか、知りたい。
- ・幼児教育や初等教育、特別支援教育に就くことはないが、困っている人がいたら助けたいと思う。病弱児に対する知識があれば、子どもが学習や治療に対して前向きになれるように支援ができる。
- ・病弱児を育てている保護者の手助けがしたいから。病弱児に対して適切な支援ができるように、支援の方法を学びたい。
- ・病気の子どもと接する機会が必ずある。病気の子どもに関する専門的な知識をもち、緊急の場合に対応できる保育士になりたい。また、保護者からの相談に対して、適切なアドバイスができるようになりたい。
- ・心身症や発達障害の子どもの行動障害について知り、どのように支援したらよいか学びたい。
- ・病弱児の心理・生理・病理で様々な病気について学ぶことができたが、まだまだ理解できていないことが多くあるから。
- ・院内学級の教育について学べると思ったから。
- ・シラバスに「病弱児教育の実践や病弱児教育に関する最近の施策を紹介する」と書いていたので興味を持った。

病弱児教育を受講している23名の学生は、全員、障害のある子どもに関わった経験がある。小学校や中学校で同級生として関わった経験、本学に入学後、ボランティア活動や教育実習、学童保育のアルバイトに関わった経験等、経験の仕方は様々であった。

一方、病弱児と関わった経験がある学生は0名である。実際は病弱児と関わったことがあるかもしれないが、関わった経験を自覚していないことも想定できる。いずれも、知的

障害児教育や肢体不自由児教育に比べて、病弱児教育に対する学生のイメージは希薄であった。

3. 3 講義の工夫

3. 3. 1 視聴覚教材の活用

学生全員が病弱児と関わった経験がないため、病弱児の生活・学習に関する指導・支援の実際が理解できるように、視聴覚教材を活用した。

- ・第1回 「ある少女の選択～18歳のいのちのメール～」
- ・第3回 「チャイルド・ケモ・ハウス」
- ・第6回 「Live 相談 優等生だった子が不登校に」
- ・第9回 「大分県立別府支援学校 特別支援教育に Pepper を活用」
「大分県立別府支援学校石垣原校 学校と病院をむすぶ遠隔授業」
- ・第11回 「NHK プロフェッショナル仕事の流儀 院内学級教師 副島賢和の仕事」
- ・第15回 「医療的ケア児の理解と支援」

教材の視聴後に学生から寄せられたコメントカードには、毎回、素直で誠実な言葉でまとめられた感想に加え、教材の視聴によって、考えたことや発展的な疑問が記述されている。特に第1回と第3回の内容については、ほぼ全員が「がんであること以外は、他の子どもと何ら変わりなく笑顔で過ごせることが大切であると強く思った」、「子どもと家族の幸せを目指して仕事をしたい」、「自分は何ができるか考えた」等の感想を述べている。一人一人のかけがえのない命のいとなみを尊重しながら、痛みや困難を抱える子どもたちや家族に関心を向け、支援したいという率直な気持ちを読み取ることができた。

3. 3. 2 キーワードの紹介

毎回、授業の導入で授業内容に関するキーワードを三つ紹介した。キーワードは、授業の内容を思い出す手掛かりになり、習得する知識に優先順位をつけることを定着させた。敢えてキーワードを紹介しないで、授業内容を振り返る際に、学生が本日のキーワードを発表する機会も設けた。また、紹介したキーワードを100字程度で説明する課題を定期的実施し、重要な内容について知識の定着を図った。最終回の授業で、毎回紹介したキーワード(45個)の一覧表が完成し、学生がまとめた要約文をキーワードの説明文として掲載することで、病弱児の教育支援のポイントも理解することができる。

4. 授業内容の改善

4. 1 病気等の状態に応じた配慮事項(授業計画 第3回～第6回)

文部科学省が2013年10月に公表した「教育支援資料」には、病弱児教育の対象となる病気の症状や教育上の配慮について掲載されている。病弱児教育を学ぶ上で、代表的な病

気の基礎的な情報を理解しておくことが重要であるため、第3回から第6回まで継続して、病気等の状態に応じた配慮事項を取り上げた。しかし、この内容は、既述したように病弱児の心理・生理・病理と重なっている。

そこで、病気の種類や病状、治療方法は、病弱児の心理・生理・病理での既習内容として扱い、病気等の状態に応じた配慮事項を考えやすくするために、慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズの内容（表3）を紹介することにした。多様な教育的ニーズは「学習」、「自己管理」、「対人」、「心理」、「連携」の5個のカテゴリーと14個のサブカテゴリーに分類された。〔6〕

表3 慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズのカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー (データ数)	サブカテゴリーを構成するデータ (一部抜粋)
学習 (73)	学習指導 (42)	学習空白、学習の遅れ (進度)、学習意欲
	前籍校 (12)	前籍校へ戻ったときの自己管理、前籍校とのつながり
	経験 (10)	生活経験不足、言語や語彙の不足
	進路 (9)	将来への希望や夢 (～したいという気持ち)
自己管理 (50)	自己理解・病気の理解 (22)	自己理解、病気の受容と理解
	自己管理 (24)	自己管理、生活習慣の乱れ、体調の確認
	ストレス (4)	治療のストレス、ストレスへの対処
対人 (44)	人間関係	人間関係 (家族との関係)、同年代との関わり
	コミュニケーション (19)	コミュニケーション (自己表現)
心理 (34)	自己肯定感・自己効力感 (15)	自己肯定感、自信が持てない、あきらめが早い
	心理的な安定 (13)	情緒の安定、気持ちのコントロール
	不安 (6)	学習面の不安を取り除く、不安の軽減
連携 (18)	医療等との連携 (12)	医療との連携、関係機関との連携
	保護者との連携・支援 (6)	保護者のストレスケア、福祉等外部機関の情報提供

表3は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の専門研究B「インクルーシブ教育システム構築における慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズと合理的配慮及び基礎的環境整備に関する研究」(2014年度～2015年度)で、慢性疾患のある児童生徒の教育的ニーズを分類・整理したものである。

4. 2 自立活動の指導 (授業計画 第9回)

病弱特別支援学校や病弱・身体虚弱特別支援学級の教育課程には、自立活動が位置付けられている。病弱児教育を行う教員にとって、自立活動は必須の知識・技能であると共に、自立活動の実践力も求められている。第9回「自立活動の指導」は、自立活動の理念・目標・内容や自立活動の視点による子ども理解、自立活動の指導の実際について、授業を行

った。特に重視したのは、慢性疾患のある児童生徒や、発達障害、精神疾患等の児童生徒の「自己管理」を支援する自立活動の内容である。しかし、病弱児教育を受講する学生全員が、病弱児と関わった経験や病弱児教育の実践を参観したことがない。学生自身が、病弱児の困難さと同様の困難さが生じる可能性を想定し、病弱児の「学習上や生活上の困難」の理解に繋げた。自立活動は、病弱児教育の専門性を支える教育内容である。自立活動について、「何を、どのように」学ばせるべきか、検討することが急務である。

2. 1 病弱特別支援学校における自立活動の実践

病弱特別支援学校における自立活動の実践について、授業で香川県立善通寺養護学校の実践例を紹介した。本校は県下で唯一の病弱特別支援学校であり、単独の病弱校としては全国的にも大きな規模の学校である。隣接する「独立行政法人四国こどもとおとなの医療センター」と連携しながら、「生涯にわたって、心豊かにたくましく生きる児童生徒を育成する」という教育方針のもと、教育活動を行っている。在籍する児童生徒の病気、障害の種類や状況は様々であり、近年、発達障害や心身症・精神疾患の児童生徒が急増している。

本校は、2015年から「一人一人の特性を踏まえた自立活動の指導の在り方～一人一人の可能性を広げるための支援方法について～」を研究主題として、3年間研究に取り組み、人間関係の形成や社会性、コミュニケーション能力を高めるための自立活動の指導方法の在り方を研究・整理した。主な研究内容は、教育課程別に児童生徒の実態の分析と自立活動における目標の立て方や指導内容の検討、教科指導等での自立活動の視点の活用である。実践の対象は、発達障害や精神疾患等の児童生徒に限定している。

4. 2. 2 「自立活動事例シート」を使用した演習

第9回の授業で、香川県立善通寺養護学校が作成した自立活動事例シートを使用して、自立活動の指導内容を記入する演習を行った。自立活動事例シートは、対象となる児童生徒の実態、ねらい、題材名、自立活動でねらうポイント、指導内容、成果、課題の項目で構成され、指導内容の欄に、活動の概要、ねらいを実現できるポイント、留意点を記述することができる。この演習で、筆者が学生に最も学んでほしかった内容は、自立活動の視点による子ども理解である。

対象となる高等部の生徒の実態を学生に説明し、ねらいを考察することにした。

実態

治療のため、長期入院を余儀なくされたことによる中学時代の学習空白から、高等部での学習を強く希望。集団での対人関係が保てず、マイナス思考になり、苦手な人を非難する。自分中心の考え方で、周囲の行動や気遣い、考え方が理解できない。

予想以上にねらいの考察に時間を要したため、多くの学生が自立活動でねらうポイントを自立活動の6つの区分から選ぶ作業に取り掛かることができなかつた。学生から「課題が難しい」という感想が寄せられた。

渡辺（2018）は、特別支援学校学習指導要領の改訂を踏まえて、病弱児教育における自立活動の指導内容と方法について、『1. 健康の保持』を中心として、『2. 心理的な安定』が必要な区分としてあげられる」〔7〕と指摘している。さらに「長期に入院している児童生徒にとっては、愛着形成や自我意識等の発達を支援するために、『3. 人間関係の形成』の項目も必要だと言える」〔8〕と指摘している。疾病や障害の特性を踏まえた指導を行うためには、自立活動の意義、目標や内容について、学生が理解を深めることができる授業の内容が不可欠である。また、多くの学生が「自立活動の指導」に関して苦手意識をもっている原因は何か、分析する必要がある。

4. 3 心身症・精神疾患のある児童生徒の指導（授業計画 第10回）

近年、増加している心身症・精神疾患等の児童生徒は症状の出現が複雑で、関わり方も難しく、自立活動を主とした病弱児教育の専門性が必要である。

筆者が担当する病弱児教育及び病弱児教育演習（配当年次4年次）の授業では、心身症・精神疾患等の児童生徒の指導・支援について、参考となる資料や実践を適宜学生に紹介し、内容について意見交換を行った。前期に病弱児教育演習を受講した学生は、全員、教職志望で、病弱児教育に対する関心が高く、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 病弱班による「精神疾患及び心身症のある児童生徒の教育的支援・配慮に関する研究 心の病気のある子どもへの支援(Co-MaMe)の提案」の内容について、積極的に意見を述べた。

また、埼玉県立けやき特別支援学校伊奈分校の「精神疾患・心身症等の児童生徒の自立活動を充実させ、復学支援に生かす取組—尺度表『自分メーター』の活用をとおして—」の「自分メーター」や「マイプラン面接」の内容について、熱心に議論した。

5. 授業内容の考察

本稿の目的は、病弱児教育の今日的課題を踏まえ、筆者が担当する病弱児教育で扱うべき内容について検討することであった。主な知見は以下の3点である。

- (1) 慢性疾患のある児童生徒の多様な教育的ニーズ（表3）の「学習」、「対人」、「自己管理」、「心理」、「連携」の5つのカテゴリーを生かして、授業の内容を構成する。

病気の種類や病状、治療法を学ぶのではなく、学生が、病弱児の学習上や生活上の困難を改善する視点を持つことができるようにする。

- (2) 心身症・精神疾患等の児童生徒の中には、発達障害の二次的障害や不登校等、適応面・行動面に困難を有する児童生徒を含んでいる。心身症・精神疾患等の児童生徒の指導について授業回数を増やすと共に、心理的特性や症状を踏まえた指導内容を計画する。

- (3) 自立活動の指導に関する授業回数を増やす。香川県立善通寺養護学校が作成した「自立活動事例シート」を継続して活用し、児童生徒の実態の分析、自立活動における目標の立て方や指導内容の検討、教科指導等での自立活動の視点の活用等を修得できるようにする。

今後、病弱児教育の授業内容の改善を図りながら、病弱児教育における専門性について考察し、具体化していきたい。

引用文献

- [1] 日下奈緒美 (2015). 「平成 25 年度全国病類調査にみる病弱教育の現状と課題」『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』第 42 巻、13-15.
- [2] 柴垣登(2020a). 「病弱特別支援学校の今日的課題についての考察－全国病弱特別支援学校実態調査から－」『立命館教職教育研究』第 7 号、46.
- [3] 柴垣登(2020b). 「病弱特別支援学校の今日的課題についての考察－全国病弱特別支援学校実態調査から－」『立命館教職教育研究』第 7 号、53.
- [4] 松井修平(2017). 平成 29 年度第 58 回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会並びに総会開催要項
- [5] 磯部健一(2020). 高松大学高松短期大学公式ホームページ>授業計画 (シラバス)、病弱児の心理・生理・病理
(http://www.takamatsu-u.ac.jp/syllabus/e_hoiku/g_hoiku.pdf) (2020 年 11 月 30 日) 閲覧
- [6] 独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所(2017). 『病気の子どもの教育支援ガイド』株式会社ジアース教育新社、30.
- [7] 渡辺実(2018a). 「特別支援学校の教育課程における自立活動の意義と指導法－病弱教育における自立活動の指導内容と方法に着目して－」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 26 号 2018 年 3 月、31.
- [8] 渡辺実(2018b). 「特別支援学校の教育課程における自立活動の意義と指導法－病弱教育における自立活動の指導内容と方法に着目して－」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第 26 号 2018 年 3 月、41.

参考文献

- (1) 全国特別支援学校病弱教育校長会 編著(2020) 『特別支援学校学習指導要領等を踏まえた病気の子どものための教育必携』ジアース教育新社
- (2) 文部科学省(2018a) 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部)』
- (3) 文部科学省(2018b) 『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)』
- (4) 香川県立善通寺養護学校(2017) 『病弱の特別支援学校における自立活動の実践事例集 第3集』
- (5) 全国特別支援学校病弱教育校長会 編著(2012) 『特別支援学校学習指導要領を踏まえた病気の子どものガイドブック』